

横芝光町三反田遺跡

— 国道126号銚子連絡道(山武東総道路二期)事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成29年3月

千葉県教育委員会

よこ しば ひかり まち さん たん だ い せき

横芝光町三反田遺跡

— 国道126号銚子連絡道(山武東総道路二期)事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの諸活動に加え、平成25年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、国道126号銚子連絡道（山武東総道路二期）事業に伴って実施した横芝光町三反田遺跡の発掘調査報告書です。今回の調査で、縄文時代中期の土器片や、古墳時代の竪穴住居跡、奈良時代の井戸等が検出されました。周辺の調査事例と併せ、当地域の砂堤と砂堤間湿地を利用した人々の生活の様相を知るうえで貴重な成果を得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成29年3月

千葉県教育委員会

文化財課長 永沼律朗

凡　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部海匝土木事務所による国道 126 号跳子連絡道（山武東総道路二期）事業に
係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

三反田遺跡（1）～（3） 山武郡横芝光町宮川 6643 ほか （遺跡コード 410-003）
- 3 発掘調査及び報告書作成に至る整理作業は、平成 25 年度から平成 28 年度に千葉県県土整備部の依頼
を受け千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。年度毎の調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・
担当者は、第 1 章第 1 節に記した。
- 4 本書の執筆は、上席文化財主事 土屋潤一郎が担当した。
- 5 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、横芝光町教育委員会、千葉県県土整備部道路整備課、千葉県
海匝土木事務所、千葉県道路公社ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 6 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第 1 図 横芝光町発行 1/2,500 横芝光町地形図 14・15・19・20 平成 20 年を編集
第 5 図 参謀本部陸軍部測量局作成 1/20,000 迅速測図「八日市場村」
第 6 図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「八日市場」「多古」「木戸」「成東」平成 22 年を編集
- 7 本書で使用した地図の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北で
ある。
- 8 土器の観察表に記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖 2007 年版」
に基づいている。
- 9 図版 1 の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和 42 年撮影のものを使用した。
- 10 遺構や遺物の図面に使用したスクリーントーン等の用例は以下のとおりである。挿図中の「K」は搅
乱の略である。



赤　彩



墨痕・黒色処理



須恵器断面

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 事業の経緯と経過.....	1
2 調査の方法と概要.....	3
第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	6
1 遺跡の位置と地形.....	6
2 周辺の遺跡.....	6
第2章 調査の成果.....	10
第1節 (1) 調査区<平成25年度調査区>.....	10
1 堅穴住居跡.....	10
2 土 坑.....	10
3 溝状遺構.....	17
第2節 (2) 調査区<平成26年度調査区>.....	17
第3節 (3) 調査区<平成27年度調査区>.....	17
1 土 坑.....	17
2 溝状遺構.....	17
第4節 遺構外出土遺物.....	21
第3章 総 括.....	25
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 事業範囲及び調査位置	2	第10図 (1) 調査区 竪穴住居跡 021	12
第2図 (1) 西 調査区	4	第11図 (1) 調査区 土坑 010	13
第3図 (1) 東・(2)・(3) 1区 調査区	4	第12図 (1) 調査区 土坑・ピット	14
第4図 (3) 2区・3区 調査区	6	第13図 (1) 調査区 溝状遺構 (1)	15
第5図 迅速測図	7	第14図 (1) 調査区 溝状遺構 (2)	16
第6図 周辺の遺跡	8	第15図 (3) 3区調査区 遺構分布図	18
第7図 (1) 西 調査区 遺構分布図	11	第16図 (3) 3区調査区 土坑・溝状遺構	19
第8図 (1) 東 調査区 遺構分布図	11	第17図 (3) 3区調査区 遺構内出土遺物	20
第9図 (1) 調査区 竪穴住居跡 008	12	第18図 遺構外出土遺物	21

表目次

第1表 遺構一覧表	5	第3表 土器観察表	22
第2表 周辺の遺跡一覧表	9		

図版目次

図版1 航空写真 (S=約 1/10,000)	図版7 (1) 東 全景・(2) 西 確認調査
図版2 (1) 西 調査区 調査前・確認調査	図版8 (2) 東 確認調査・(3) 1~3区
図版3 (1) 西 確認調査・全景・遺構	図版9 (3) 3区遺構
図版4 (1) 東 調査前・確認調査・遺構 (1)	図版10 遺構出土遺物 (1)
図版5 (1) 東 遺構 (2)	図版11 遺構出土遺物 (2)
図版6 (1) 東 遺構 (3)	図版12 遺構出土遺物 (3)・遺構外出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 事業の経緯と経過（第1回）

千葉県では、県北東部の人と物資の流通を充実させるために、現在、横芝光インターチェンジまで利用されている山武東総道路を銚子市方面まで延伸させることを計画した。この建設計画にあたって横芝光町から匝瑳市横須賀にかけての約1.6kmについて、平成21年4月に、千葉県海匝土木事務所長より事業地内における「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査等の結果を踏まえ、平成21年11月に事業計画地内に7か所の遺跡が所在する旨の回答を行った。そして、この回答を受け、その取扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、千葉県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

三反田遺跡の発掘調査は、平成25年度から27年度にかけて3か年度にわたり、合計10,275m²に対して実施された。調査は、砂堤上に位置する遺跡の特性上、立川ローム層の堆積がなく、旧石器時代を対象とする調査は不要と判断された。

平成25年度調査は、8月16日に開始し、10月2日まで調査対象8,220m²に対して1,124m²の上層確認調査が行われた。その結果、2,400m²の本調査が実施され、堅穴住居跡2軒・土坑10基・井戸状遺構1基・溝状遺構14条を検出した。遺物は、縄文土器・土師器・須恵器を検出し、12月25日に終了した。

平成26年度調査は、10月1日に開始され、10月16日まで調査対象規模1,315m²に対して、540m²の確認調査が実施された。その結果、注目すべき遺構・遺物は検出されず、確認調査で終了した。

平成27年度調査は、周知された三反田遺跡の範囲においては中央部北端にあたり、7月13日から7月23日まで調査対象面積740m²に対して、100%の740m²確認調査を行った。その結果、320m²の本調査が決定され、古墳時代・奈良時代・中世の溝状遺構18条、奈良時代の土坑3基を検出した。遺物は、土師器・須恵器・中世陶器を検出し、8月7日に終了した。

平成28年度には三反田遺跡（1）～（3）の調査成果を報告書にまとめる整理作業を実施した。

なお、各年度の調査組織及び担当者は以下のとおりである。

発掘調査

○平成25年度【千葉県教育庁教育振興部文化財課】

文化財課長 湯浅京子 発掘調査班長 蜂屋孝之

三反田遺跡（1） 担当者 主任上席文化財主事 土屋潤一郎 上席文化財主事 黒沢 崇

○平成26年度【千葉県教育庁教育振興部文化財課】

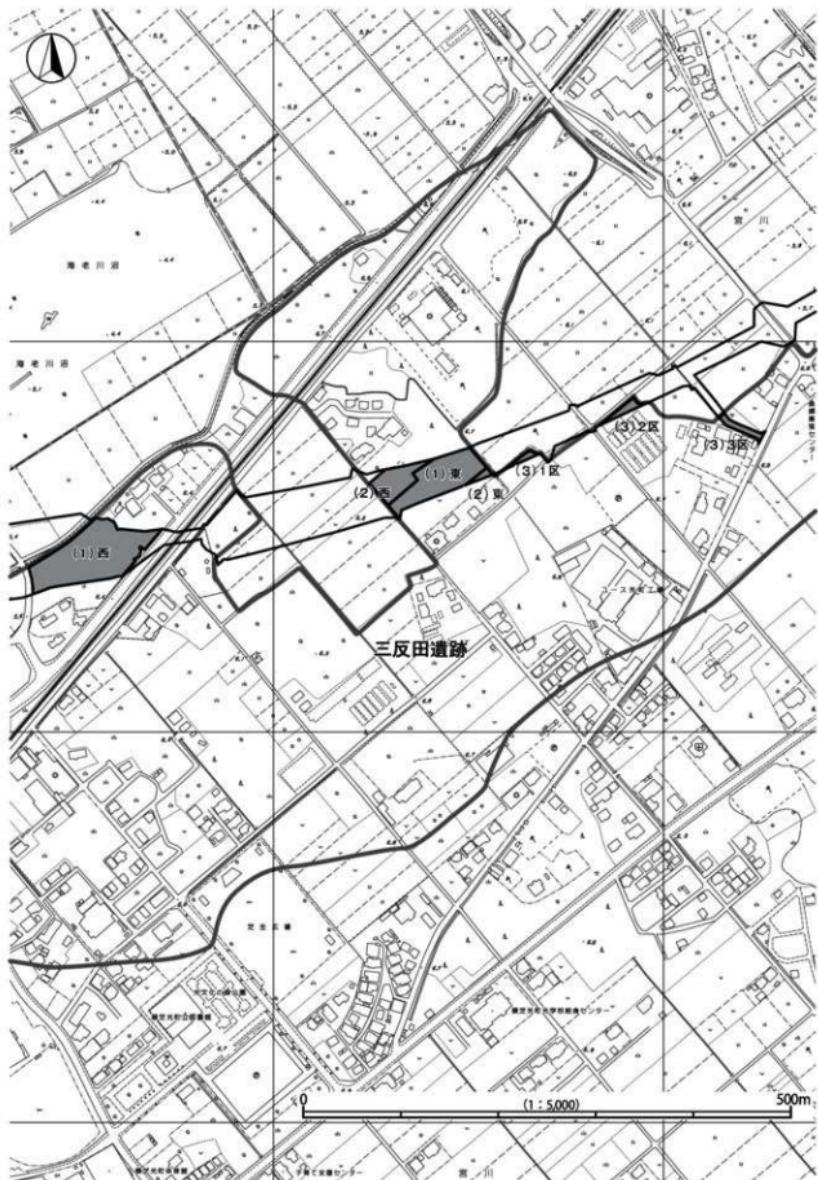
文化財課長 永沼律朗 発掘調査班長 蜂屋孝之

三反田遺跡（2） 担当者 主任上席文化財主事 土屋潤一郎

○平成27年度【千葉県教育庁教育振興部文化財課】

文化財課長 永沼律朗 発掘調査班長 蜂屋孝之

三反田遺跡（3） 担当者 上席文化財主事 土屋潤一郎



第1図 事業範囲及び調査位置

整理作業

○平成 28 年度【千葉県教育厅教育振興部文化財課】

文化財課長 永沼律朗 発掘調査班長 田井知二

三反田遺跡(1)～(3)担当者 上席文化財主事 土屋潤一郎

2 調査の方法と概要（第2～4図）

三反田遺跡の調査は、道路建設を目的とする事業の性格上、調査範囲が狭長となるため、事業の進捗に合わせ、多年度にわたる調査計画を立てた。各年度とも縄文時代以降を対象とした上層の確認調査を実施した。基本的には、幅2mを原則として、地形条件等を考慮しながら長さを適宜調整したトレンチを設定し、表土等を重機で除去した後、遺物・遺構の検出に努めた。確認調査の結果に基づき本調査範囲を決定し、範囲内の遺構等について精緻な調査を実施した。

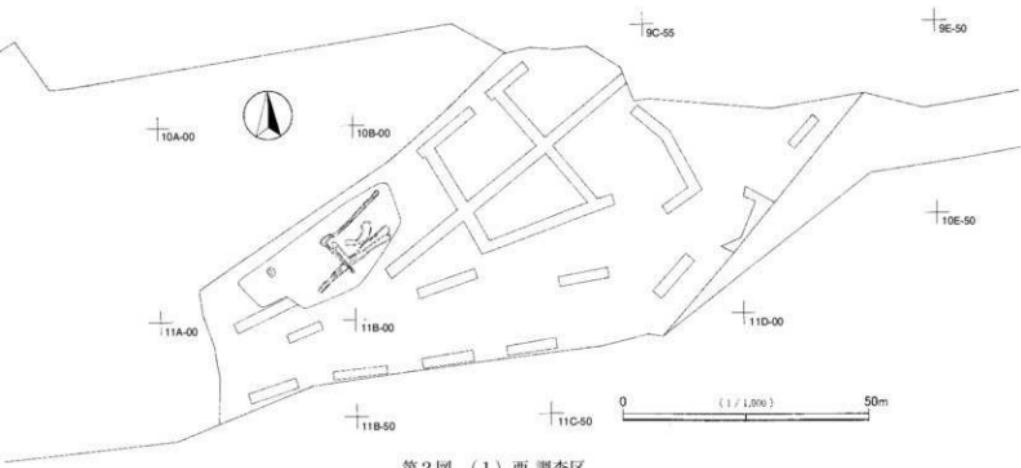
平成25年度調査においては、調査区が国道126号線及びJR総武本線をはさみ東西2か所に分かれたため、それぞれ三反田遺跡(1)西調査区、(1)東調査区と呼称した。西調査区は、砂堤の端部に溝状遺構が存在し、一部は道路として使われたと見られる。また、確認調査時に縄文時代中期の土器片が出土している。東調査区は、幅の細い砂堤の高みに古墳時代後期の堅穴住居跡が検出され、砂堤裾部に奈良時代の井戸と思われる土坑を検出した。

平成26年度調査では、遺跡名称を三反田遺跡(2)とし、前年度に調査した東調査区の隣接地2か所が調査対象とされたが、確認調査の結果、遺構等は検出されず本調査には至らなかった。

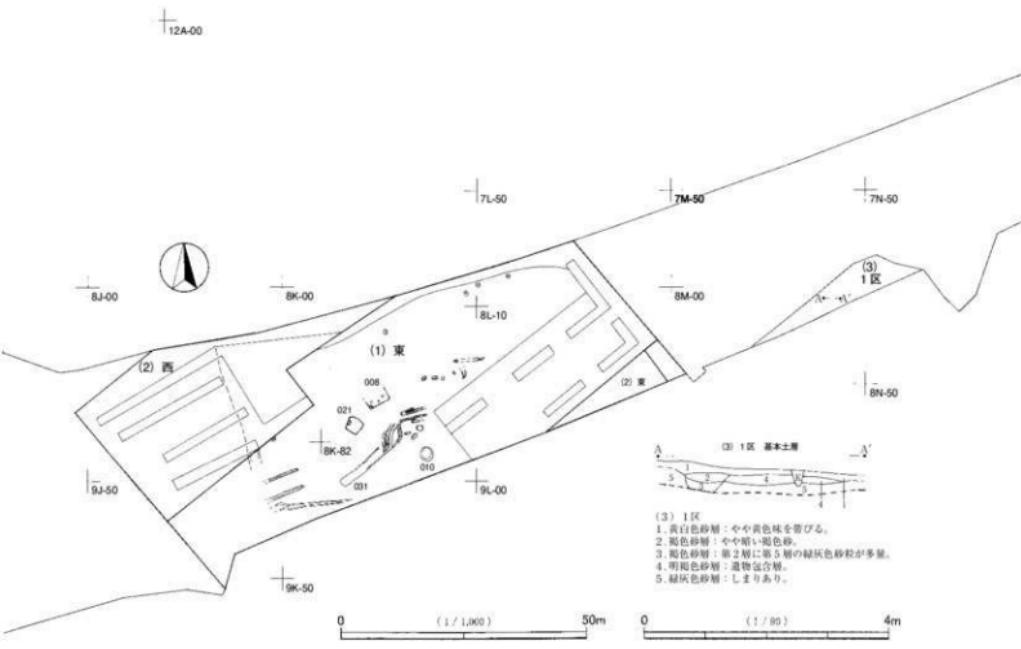
平成27年度の調査では、計画路線に沿って更に東進した3か所の調査区が対象とされた。それぞれについて西から三反田遺跡(3)1区、(3)2区、(3)3区と呼んだ。いずれの調査区も砂堤と湿地の境界付近にあたり、1区は砂堤上ではあるが遺構は検出されず、2区は湿地上に盛り土された部分であった。3区は、砂堤から緩やかに湿地に向かい傾斜する部分で、古墳時代から中世にかけての溝状遺構を主体として、数基の土坑も検出した。

現地での記録作成は従来どおり平板測量を行い、トレンチ・遺構平面図、遺構断面図についても手実測により行った。写真撮影はデジタルカメラ(Raw・JPEGデータ)とともに、6×7モノクロ、35mmカラーリバーサルフィルムカメラにより実施した。調査グリッドは、40m×40mの大方眼の中を4m四方の小グリッドに100分割し実測基本とした。

整理作業は調査図面・写真的記録整理から開始し、出土遺物の水洗・注記、接合作業と実測を実施した。併行して、現場図面の鉛筆トレース・修正を行い、挿図原図を作成した。挿図は従来どおりのペントレースにより作成し、写真図版は遺構・遺物ともデジタルデータで編集した。それらの作業と並行して原稿執筆を行い、その後、編集・校正作業をへて、この度報告書刊行となった。また、編集中に報告書に基づいた収納整理作業も併せて実施した。



第2図 (1) 西調査区



第3図 (1) 東・(2)・(3) 1区調査区

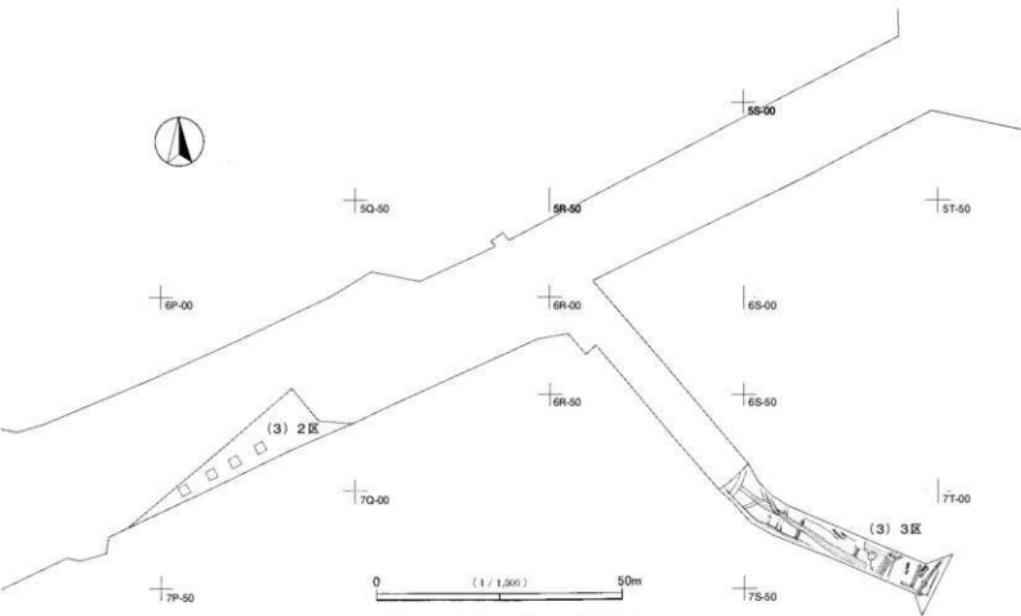
第1表 遺構一覧表

< > 現存長・単位m

地点	遺構No	種類	時期	位置(主グリッド)	主軸	長軸(長さ)	短軸(幅)	深さ
(1) 東	0 0 1	ピット		8 K - 09	N - 33° - W	1.12	0.84	0.44
(1) 東	0 0 2	ピット		7 L - 90		0.98	-	0.58
(1) 東	0 0 3	ピット		7 L - 91		0.94	-	0.38
(1) 西	0 0 4	土坑	平安	10 A - 75	N - 28° - W	1.93	1.62	0.32
(1) 西	0 0 5	溝状遺構	平安	10 B - 51		16.0	1.4	0.28
(1) 西	0 0 6	溝状遺構	中世	10 B - 40		12.4	0.32 ~ 1.18	0.44
(1) 西	0 0 7	溝状遺構	平安	10 B - 60		15.0	1.2	0.34
(1) 東	0 0 8	堅穴住居跡	古墳	8 K - 54	N - 26° - W	?	4.74	0.16
(1) 東	0 0 9	土坑	古墳	8 K - 48	N - 37° - W	0.74	0.5	0.32
(1) 東	0 1 0	土坑	奈良	8 K - 87	N - 7° - W	2.94	2.7	1.08
(1) 東	0 1 1	溝状遺構	中世	8 K - 39		6.44	0.7	0.11
(1) 東	0 1 2	溝状遺構	中世	8 K - 49		2.0	0.76	0.09
(1) 東	0 1 3	矢垂						
(1) 東	0 1 4	溝状遺構	中世	8 K - 75		4.56	0.72	0.4
(1) 東	0 1 5	溝状遺構	中世	8 K - 75		5.02	0.66	0.12
(1) 東	0 1 6	溝状遺構	中世	8 K - 75		5.8	0.7	0.28
(1) 東	0 1 7	土坑	古墳	8 K - 48	N - 23° - W	0.72	0.54	0.3
(1) 東	0 1 8 ~ 0 1 9	土坑	古墳	8 K - 47	N - 75° - E	1.36	0.68	0.46
(1) 東	0 2 0	土坑	古墳	8 K - 47	N - 54° - E	1.2	0.62	0.54
(1) 東	0 2 1	堅穴住居跡	古墳	8 K - 73	N - 63° - W	2.94	0.3	0.24
(1) 東	0 2 2	ピット	中世	8 K - 69	N - 43° - E	0.98	0.68	0.52
(1) 東	0 2 3	土坑	中世					
(1) 東	0 2 4	土坑	奈良	8 K - 76	N - 44° - E	1.76	0.86	0.27
(1) 東	0 2 5	土坑	奈良	8 K - 77	N - 71° - W	1.6	1.3	0.12
(1) 東	0 2 6	溝状遺構	中世	8 K - 66		2.3	0.6	0.12
(1) 東	0 2 7	溝状遺構	中世	8 K - 57		10.0	0.5	0.04
(1) 東	0 2 8	溝状遺構	中世	8 K - 57		5.3	0.6	0.1
(1) 東	0 2 9	溝状遺構	中世	8 K - 57		2.36	0.42	0.08
(1) 東	0 3 0	溝状遺構	中世	8 K - 75		1.82	0.34	0.09
(1) 東	0 3 1	溝状遺構	中世	8 K - 94		2.56	1.82	0.06

(2) 遺構なし

(3) 3区 SK001	土坑	古墳	7 S - 59	N - 50° - W	1.32	1.1	<0.52>
(3) 3区 SK002	土坑	奈良	7 S - 37	N - 76° - E	1.84	1.6	0.3
(3) 3区 SK003	土坑	奈良	7 S - 48	N - 24° - E	1.0	-	-
(3) 3区 SD001	溝状遺構	奈良	7 T - 50		<5.2>	<0.1>	0.4
(3) 3区 SD002	溝状遺構	奈良	7 S - 59		<8.64>	0.64	0.36
(3) 3区 SD003	溝状遺構	古墳	7 S - 58		<5.4>	<0.72>	0.06
(3) 3区 SD004	溝状遺構	中世	7 S - 49		2.8	0.68	0.16
(3) 3区 SD005	溝状遺構	奈良・平安	7 S - 49		<2.0>	0.36	0.05
(3) 3区 SD006	溝状遺構	奈良・平安	7 S - 49		<5.16>	0.72	0.11
(3) 3区 SD007	溝状遺構	奈良・平安	7 S - 48		2.6	0.44	0.05
(3) 3区 SD008	溝状遺構	中世	7 S - 48		<5.44>	1.4	0.02
(3) 3区 SD009	溝状遺構	中世	7 S - 48		<1.6>	0.4	0.17
(3) 3区 SD010	溝状遺構	奈良・平安	7 S - 47		<5.4>	0.72	0.13
(3) 3区 SD011	溝状遺構	奈良・平安	7 S - 47		<5.4>	<3.6>	0.1
(3) 3区 SD012	溝状遺構	中世	7 S - 27		<4.26>	0.7	0.13
(3) 3区 SD013	溝状遺構	中世	7 S - 22		<4.7>	0.74	0.12
(3) 3区 SD014	溝状遺構	中世	7 S - 11		<2.26>	0.72	0.06
(3) 3区 SD015	溝状遺構	中世	7 S - 12		<1.0>	0.7	-
(3) 3区 SD016	溝状遺構	奈良・平安	7 S - 25		<3.1>	<0.5>	0.2
(3) 3区 SD017	溝状遺構	近世	7 S - 25		<2.5>	0.82	-
(3) 3区 SD018	溝状遺構	中世	7 S - 22		<7.5>	<0.64>	0.1
(3) 3区 SD019	溝状遺構	現代	7 S - 12		<16.0>	1.44	-



第4図 (3) 2区・3区調査区

第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置と地形（第5図）

三反田遺跡の所在する九十九里平野は、房総半島太平洋側沿岸部分の北側ほぼ半分を占め、北東から南西に弧状に伸びる海岸平野である。この平野は隆起海岸であり、海岸線の延長約60km、奥行き約10kmの平野規模を持つ。縄文時代以降の海退現象が複雑に作用しながら、10列以上の砂堤列と砂堤間の湿地列が交互に海岸線と並行して走る地形を作り上げたと考えられ、砂堤列平野としては、日本最大規模を有する。

この砂堤列は、形成された順に大きく三つのグループに分けられ、縄文時代中期には形成されていた一番台地寄りの一群を第Ⅰ砂堤列群、縄文時代後期に一部形成され、海岸線と山裾の中間部に位置するものを第Ⅱ砂堤列群、古墳時代に陸化され始めた海岸線寄りの一群を第Ⅲ砂堤列群と呼ぶ。

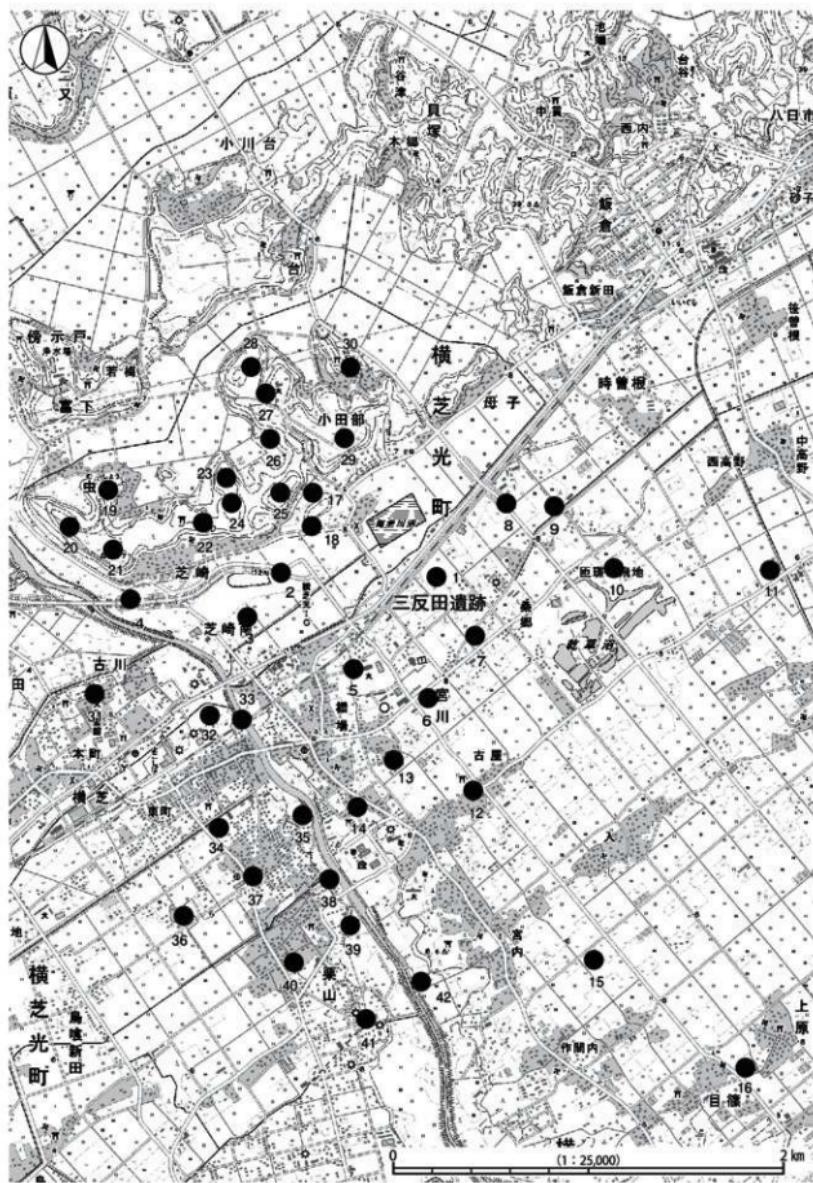
三反田遺跡は、九十九里平野の北半部中央やや南を流れる栗山川の東岸1.5km前後に位置し、砂堤列でも一番下総台地に寄った第Ⅰ砂堤列群の標高6~7mの砂堤上に位置する。また、この周辺は近代まで、砂堤と砂堤間湿地の景観的な面影を、色濃く残していた地域である。

2 周辺の遺跡（第6図）

三反田遺跡は横芝光町宮川に所在し、九十九里平野のはば中央部に位置する。九十九里平野内の第Ⅰ砂堤列群は、平野の南部地域で著しく発達しており、平野の中央部ではやや希薄な存在となり、北端部分において再び顯著な発達がみられる。したがって、三反田遺跡の周辺にある遺跡は、平野部分では、下総台地の南裾部に伸びる砂堤や、栗山川に沿って伸びる自然堤防的な砂丘上に位置するものが多い。2の律令



第5図 快速測図



第6図 周辺の遺跡

時代の官衙を想起させる中島遺跡や、3の弥平野遺跡、畠跡等によって平安時代の農村環境を良好に示す4の芝崎遺跡等が前者にあたり、14の宮内前遺跡や35の赤岩遺跡、38の宮後遺跡、41の平和遺跡等が後者にある。いずれの遺跡も古墳時代から平安時代までに含まれる遺跡である。第I砂堤列群に位置する8・9の瓜幕(1)遺跡・同(2)遺跡や、7の土代遺跡、10の込長遺跡等もこの時代に含まれ、縄文時代の遺物・遺構を検出した遺跡は、中島遺跡、弥平野遺跡等少数である。三反田遺跡も今回の調査において、縄文時代中期の土器片を検出しており、平成12年度の東総文化財センターによる調査においても縄文時代後期の土器を検出している。これらの土器はいずれも国道126号線の北側から出土したもので、以上の例から縄文時代の遺物は、より台地に近い部分で検出される傾向にあることが分かった。このことは、陸地形が台地寄りから進み、三反田遺跡付近の砂堤が、縄文時代には形成される途上にあり、人々が集落を形成するには至らず、一時的な活動の場であったことを示すものであろう。

第2表 周辺の遺跡一覧表

No	遺跡名	時代	種類	立地	No	遺跡名	時代	種類	立地
1	三反田遺跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世	包蔵地・集落	砂堤上	22	芝崎古墳群	古墳	古墳	台地上
2	中島遺跡	縄文・古墳・奈良・平安	包蔵地	砂堤上	23	王子台遺跡	古墳・奈良・平安	包蔵地	台地上
3	弥平野遺跡	縄文・古墳・奈良・平安	包蔵地	自然堤防	24	中城城跡	中世・近世	城館跡	台地上
4	芝崎遺跡	奈良・平安	集落跡	自然堤防	25	古城城跡	中世・近世	城館跡	台地上
5	藤木遺跡	古墳・奈良・平安	包蔵地	砂堤上	26	鬼堂遺跡	古墳・中世	集落・寺院跡	台地上
6	鶴巣遺跡	平安	包蔵地	砂堤上	27	駒形城跡	中世・近世	城館跡	台地上
7	土代遺跡	古墳・奈良・平安	包蔵地	砂堤上	28	駒形遺跡	縄文・古墳・奈良・平安	貝塚・集落	台地上
8	瓜幕(1)遺跡	古墳・奈良・平安	包蔵地	砂堤上	29	小田部遺跡	縄文・古墳・奈良・平安	包蔵地	台地上
9	瓜幕(2)遺跡	古墳	包蔵地	砂堤上	30	小田部砦跡	中世・近世	城館跡	台地上
10	込長遺跡	古墳・奈良・平安	包蔵地	砂堤上	31	龍ヶ塚遺跡	古墳・奈良・平安	包蔵地	砂堤上
11	高田遺跡	縄文	包蔵地	砂堤上	32	横芝居遺跡	縄文	船木舟	低湿地
12	周下遺跡	平安	包蔵地	砂堤上	33	栗山川丸木舟出土地(3)	縄文	船木舟	低湿地
13	名木遺跡	平安	包蔵地	自然堤防	34	伊古多遺跡	奈良・平安	包蔵地	自然堤防
14	宮内前遺跡	古墳・奈良・平安	包蔵地	自然堤防	35	赤岩遺跡	平安	包蔵地	自然堤防
15	人表遺跡	平安	包蔵地	砂堤上	36	柳立遺跡	平安	包蔵地	砂堤上
16	上原遺跡	平安	包蔵地	砂堤上	37	庚申塚遺跡	奈良・平安	包蔵地	自然堤防
17	長辻田遺跡	縄文・奈良・平安	包蔵地	台地斜面	38	宮後遺跡	平安	包蔵地	自然堤防
18	浅間遺跡	平安	包蔵地	台地斜面	39	馬場川遺跡	平安	包蔵地	自然堤防
19	田中砦跡	中世・近世	城館跡	台地上	40	沢田遺跡	平安	包蔵地	自然堤防
20	虫生古墳群	古墳	古墳	台地上	41	平和遺跡	古墳・奈良・平安	包蔵地	自然堤防
21	虫生遺跡	縄文・古墳・奈良・平安	包蔵地・貝塚	台地上	42	栗山川丸木舟出土地(4)	縄文	船木舟	低湿地

参考文献

- 森脇 広 1979年「九十九里浜平野の地形発達史」『第四紀研究』第18卷第1号
 西山太郎 2002年「九十九里地域の低地道路跡再考」『財團法人東総文化財センター設立10周年記念論集』
 千葉県教育委員会 1998年『千葉県埋蔵文化財分布地図(4)』(改訂版)
 道澤 明ほか 2006年「芝崎遺跡群-国道126号山武東総道路建設に伴う埋蔵文化財調査-』
 財團法人東総文化財センター発掘調査報告書第33集

第2章 調査の成果

第1節 (1) 調査区<平成25年度調査区>

1 竪穴住居跡

竪穴住居跡は東調査区で2軒検出されている。調査区の中央部に5mほどの間隔で存在する。

008号遺構 (第9図、図版4・5・10)

北側の半分以上を掘削により欠失しているため、カマドの存在は確認されず、正確な規模も不明である。残存する部分の東西長は、4.9mを測る。壁高は20cm弱で、床面、壁面ともに砂地である。柱穴は、2本検出され、柱間は2.6mである。南壁中央部から70cm内側に梯子穴があり、南西隅に貯蔵穴を持つ。

遺物 1～5は土師器の壺である。器径はいずれも13cm～14cmを測る。1は丸底から体部が緩く開き、口縁部は垂直に立ち上がる。2は深みのある壺で、丸底から僅かに屈曲して開く体部から口縁部ではば垂直に立ち上がり、口唇部が外反する。3は丸底から体部が湾曲して開き口唇部が僅かに内傾する。4は蓋受け部を持ち、口縁部は僅かに内径する。5は口縁部下で屈曲し口唇部が僅かに外反して立ち上がる。6は高壺口縁部下で強く屈曲し口縁部が外反気味に立ち上がる。脚部は大径で裾部は大きく開く。10は支脚、11は土玉である。

021号遺構 (第10図、図版6・10)

基本的には一辺3.2mの正方形の竪穴住居跡である。北側角付近が壁部の崩落により変形したと考えられる。北西壁の中央部にカマドを持つが、燃焼部の熱変化は僅かである。

遺物 1は土師器の壺である。緩く内湾して開く体部から口縁部は強く屈曲して内傾する。2は高壺の脚部裾で、外反して開く。

2 土坑

010号遺構 (第11図、図版5・10・11)

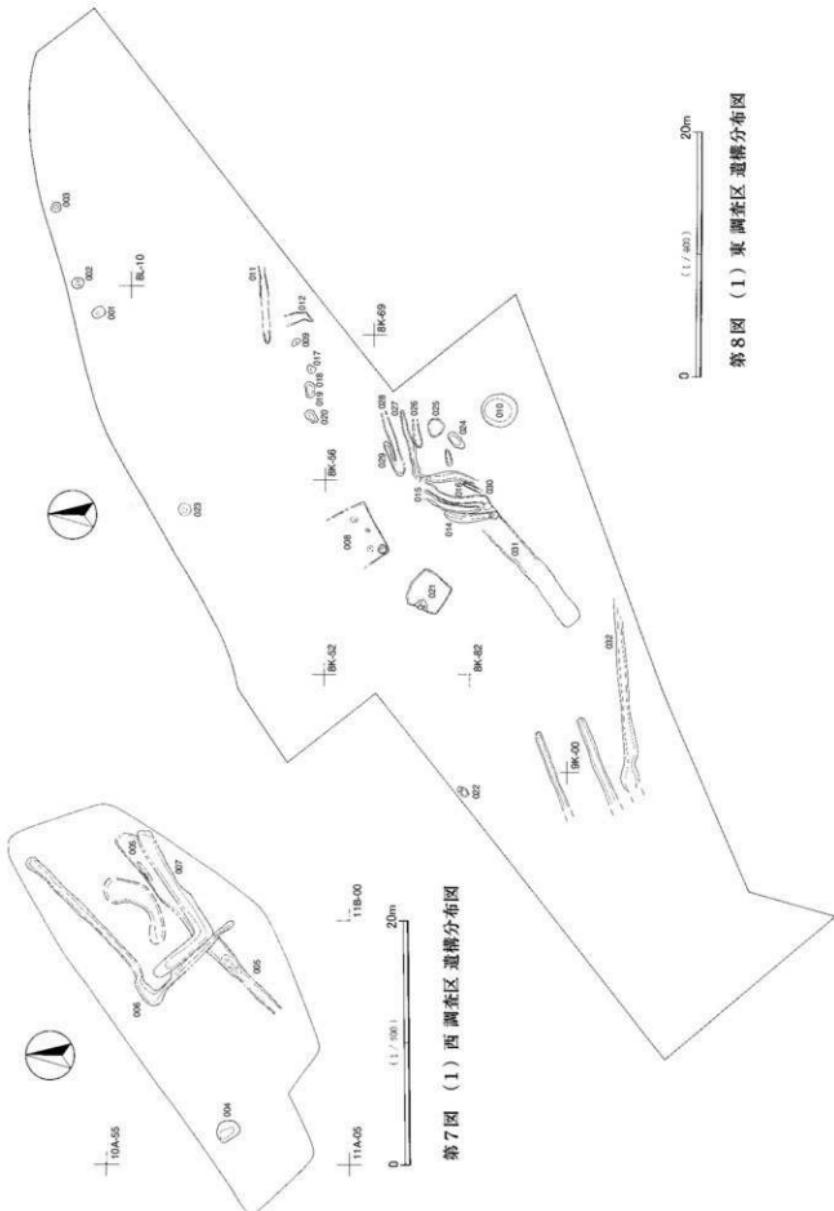
東調査区中央部南に位置し、標高は、調査区最高地より40cm～50cm低い。平面の規模は、南北3.0m、東西2.8mでややいびつな丸形である。湧水が著しく、比較的短時間で水深70～80cmになる。おそらく、簡易な井戸として使用されたものである。

遺物 1と16は須恵器の壺である。2～9は土師器の壺であり、口縁部径は14cm前後となっている。2・3は丸底で口縁部が垂直に立つ。4・5は底部外面に線刻が見られる。5は丸みを帯びた底部だが、体部が強く屈曲し部位の差を明確にしている。6・7・8は平底の壺で、10は楕円土器である。11～15は小形の壺で、最大径は13～15cmのものである。17・18は壺で、17はなで肩で頸部は強く「く」字状に屈曲し口縁部が大きく開く。18は肩の張りが強く、頸部は緩く屈曲し、口唇部が垂直につまみ上げられる。19は瓶で頸部下に3単位の突起を持つ。20は須恵器壺の破片で、硯に転用されており、内面に墨痕が残る。21は砥石である。

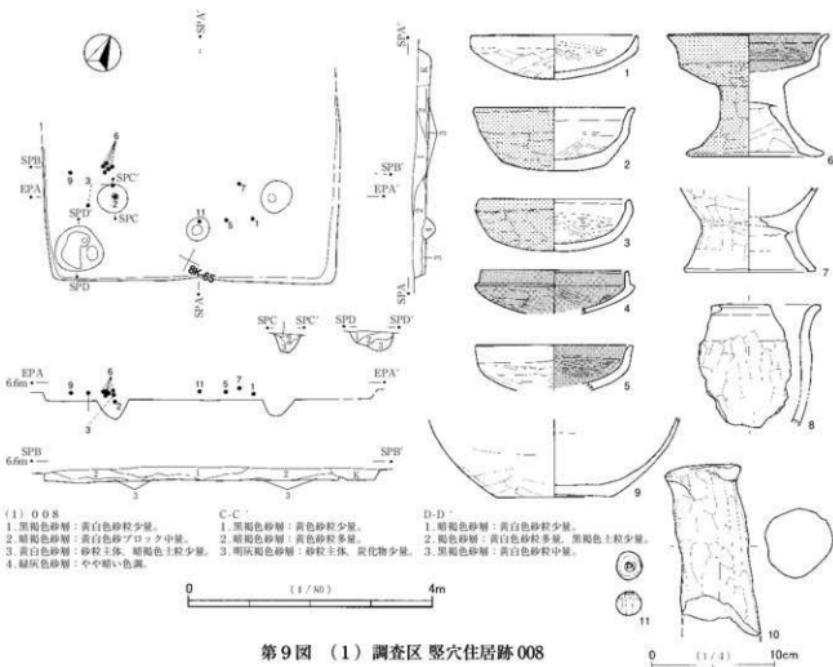
009号遺構 (第12図、図版5・11)

東調査区中央部やや東の標高の高い部分に位置する、小型の土坑である。

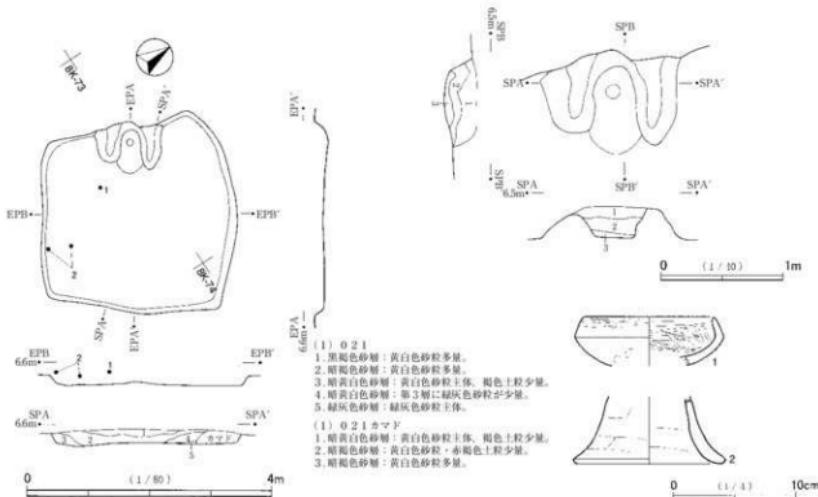
遺物 1～3は土師器の壺である。1は僅かに丸みを帯びた底部から体部が外傾して立ち上がり、口



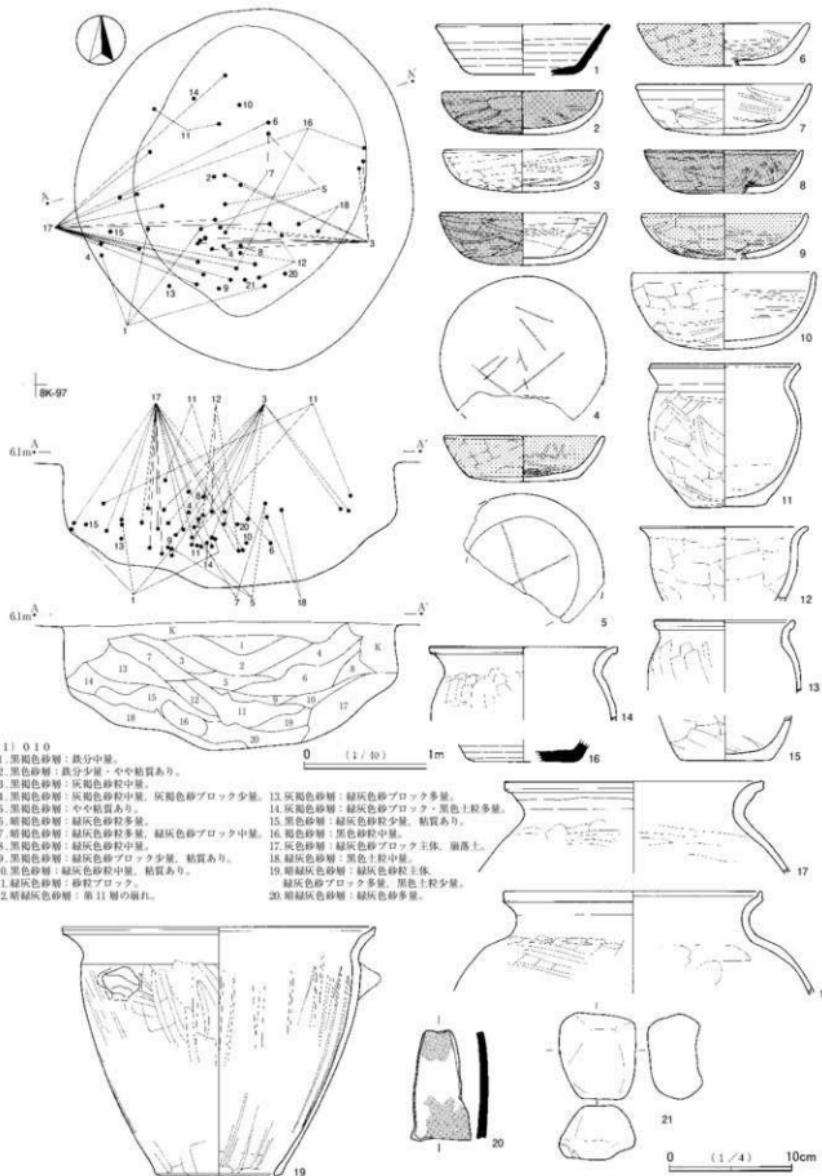
第7図 (1) 西調査区遺構分布図



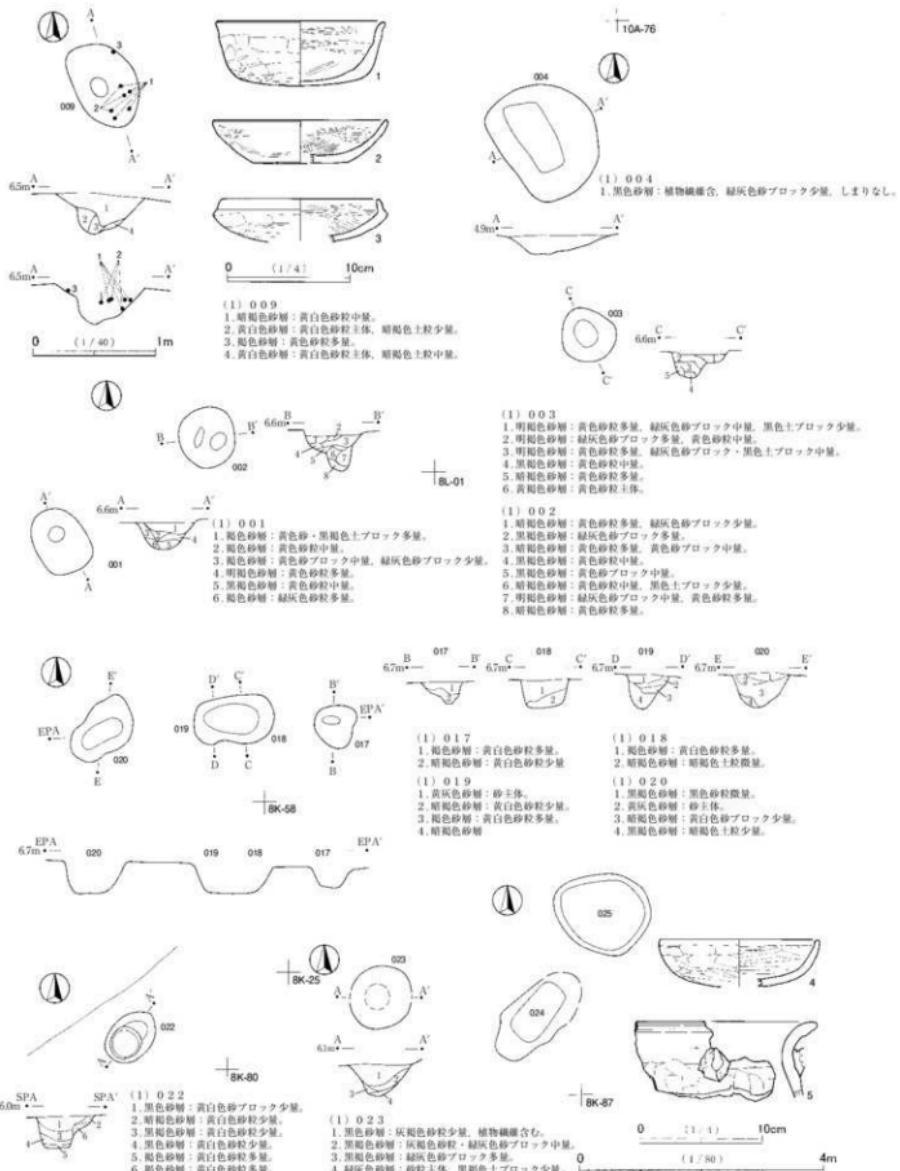
第9図 (1) 調査区 竪穴住居跡 008



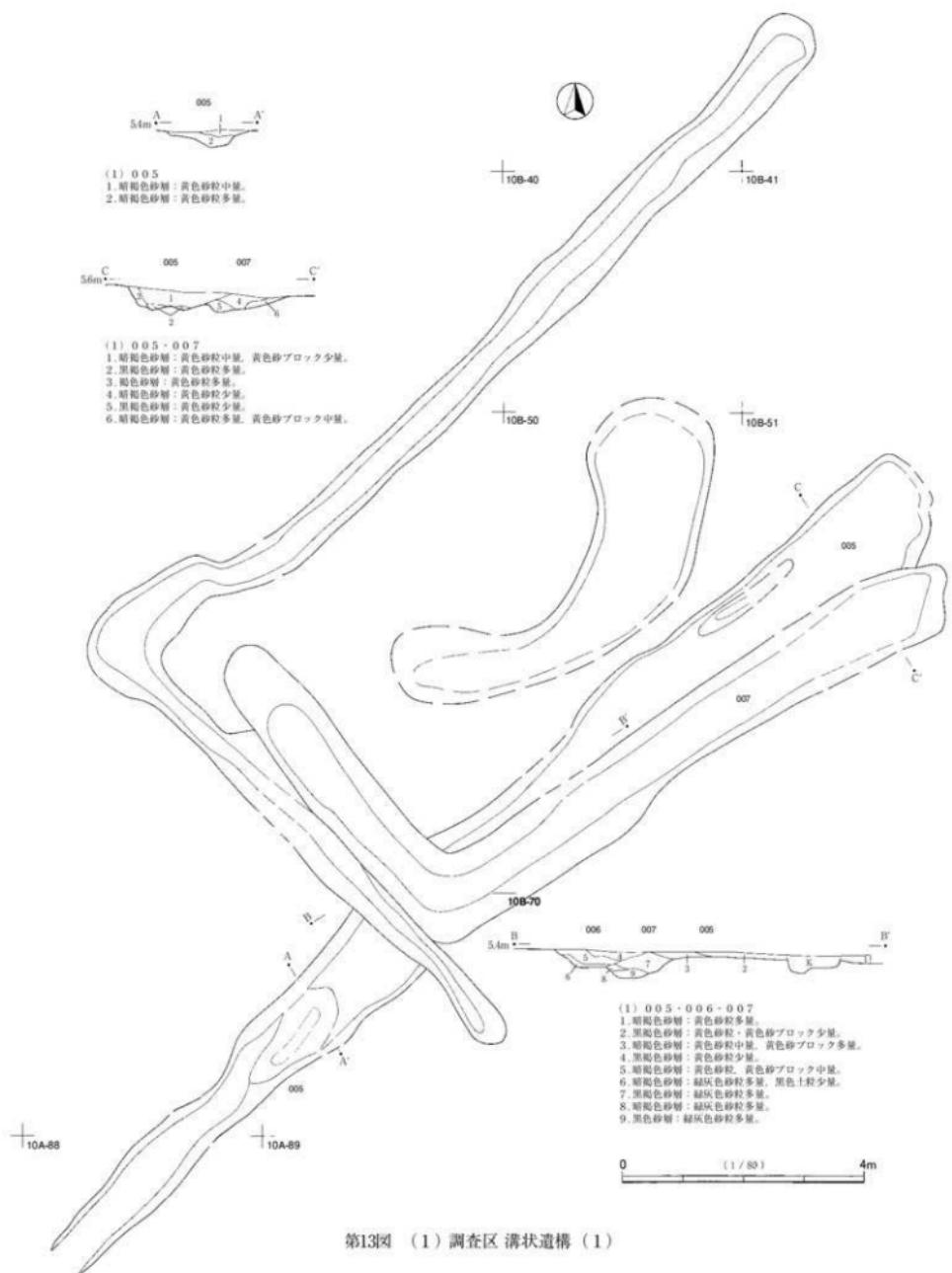
第10図 (1) 調査区 竪穴住居跡 021



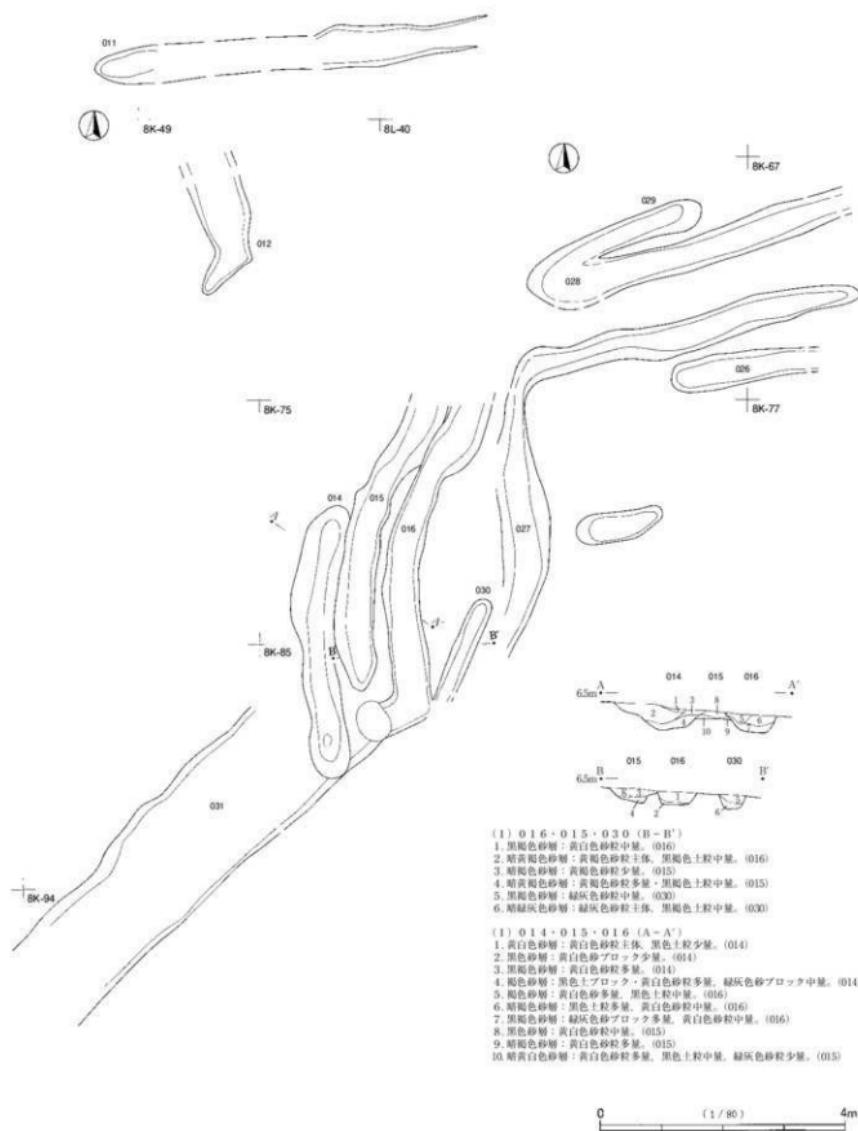
第11図 (1) 調査区 土坑010



第12図 (1) 調査区 土坑・ビット



第13図 (1) 調査区 溝状遺構 (1)



第14図 (1) 調査区 構状遺構 (2)

唇部が外反する。2は平底で体部が内湾して大きく開く。3は明確な稜がみられる蓋受部を持つ。

024・025号遺構（第12図、図版11）

010号遺構の北側5mほどに位置する。耕作により破壊された部分が多い。

遺物 4は024号遺構から検出された土師器坏である。5も024号遺構から出土した土師器瓶片である。

004号遺構（第7図、図版4）

西調査区西側に位置する。標高が5mに満たない部分にあり、湧水が認められる。土師器坏の底部小破片が検出されている。

3 溝状遺構

005号遺構（第13図、図版3）

底面の一部に硬化した部分が認められ、通路として使用されたものであろう。

第2節（2）調査区<平成26年度調査区>（第3図、図版7・8）

(2) 調査区は、平成25年度に調査した(1)東調査区に隣接した部分である。(2)西調査区は(1)東調査区の北西にあたり、ほとんどの部分が近・現代の水田部であり湧水する。(2)東調査区は(1)調査区の東南部部分であるが、遺構は検出されなかった。

第3節（3）調査区<平成27年度調査区>

(3) 調査区の調査は西から順に1・2・3区の3か所に分かれている。そのうち遺構が検出されたのは、3区のみである。

1 土 坑

SK001（第16・17図、図版9・11）

直径1.3m前後の土坑であるが、深さ0.7mあたりで湧水が著しくなり、調査不能となった。水を溜める井戸状の施設であろう。

遺物 1は土師器杯で外面はヘラ削りされる。2は須恵器の坏である。底部全面に回転ヘラ削りが施される。底径と口径の比は小さい。3は土師器の椀で、口径20cmを超える大型のものである。4は腰型の須恵器で注口を有する。

SK002（第16・17図、図版9・11）

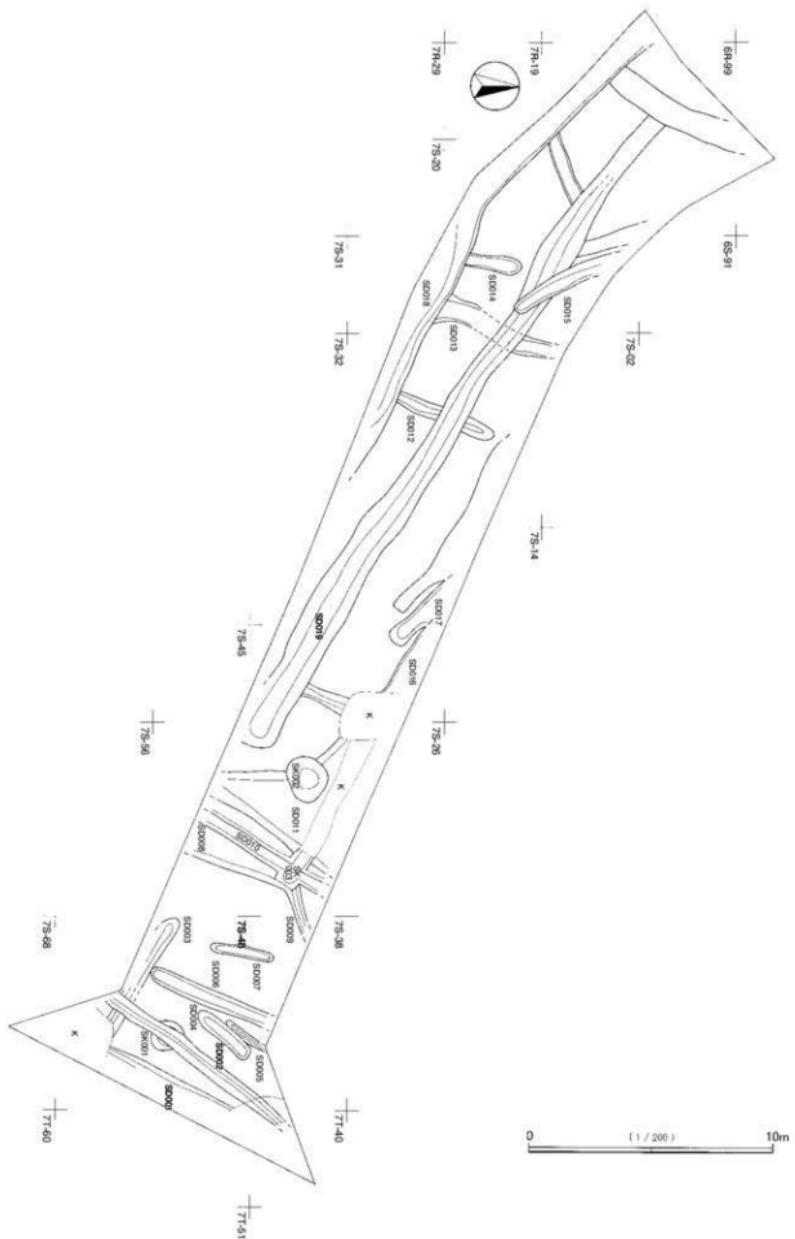
1.8m×1.6mの楕円形を呈する土坑で、深さ0.4mである。底面から湧水がみられる。

遺物 5・6は土師器坏で、7は高坏の脚部である。8は須恵器長頸壺の口縁部片である。9は砥石と思われる。

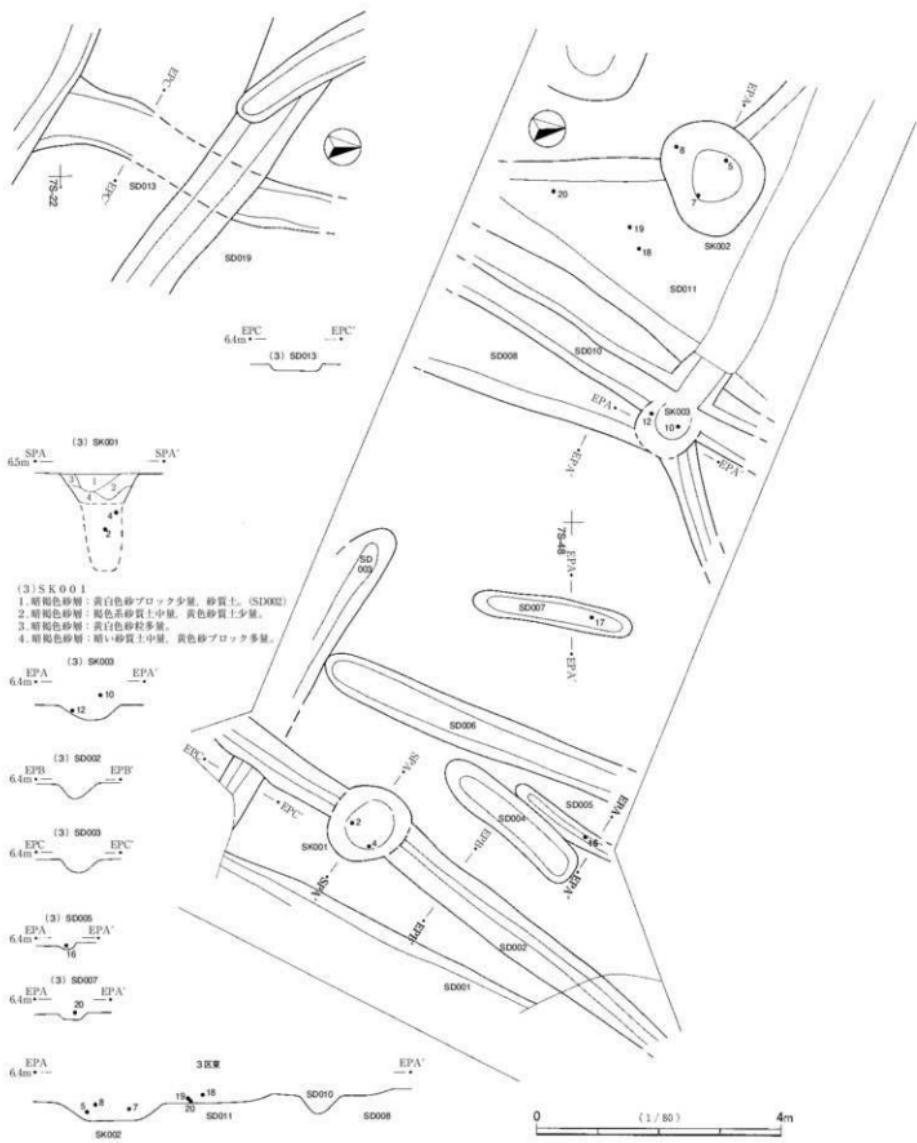
SK003（第16・17図、図版11・12）

直径1.0mの円形土坑であり、深さ0.1mである。SD008やSD010に切られ、遺存度は低い。

遺物 11は須恵器坏の底部片で、回転ヘラ削りされている。12は須恵器坏蓋の紐で、低いボタン状の



第15図 (3) 3区調査区 遺構分布図



第16図 (3) 3区調査区 土坑・溝状遺構

ものである。13は須恵器甕の胴部破片である。

2 溝状遺構

SD001 (第15・16・17図、図版8)

断面が逆台形を呈する。

SD002 (第15・16図、図版12)

逆台形の断面を呈する。中世陶器の小破片が出土している。

遺物 14は土師器坏の破片で、外面に赤彩が施される。

SD003 (第16・17図、図版12)

断面が逆台形を呈するもので、古墳時代の土師器片が出土している。

遺物 15は須恵器坏蓋で外縁部は垂直に立つ。

SD005 (第16・17図、図版12)

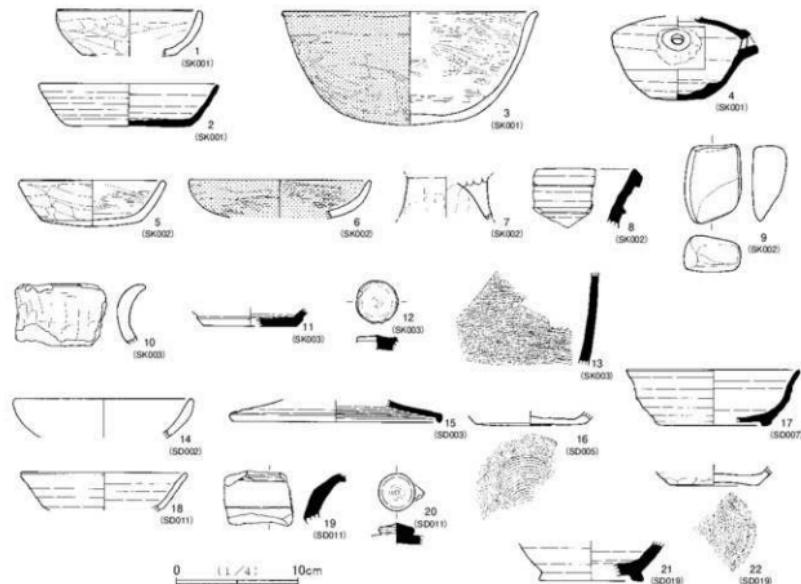
浅い溝である。

遺物 16は土師器坏の底部片で、回転糸切り後周縁部手持ちヘラ削りしている。

SD007 (第16・17図、図版9・12)

断面が「U」字状の溝である。

遺物 17は須恵器の高台付坏で、ロクロ目が顕著にみられる。内湾した体部から口縁部は外反する。



第17図 (3) 3区調査区 遺構内出土遺物

高台は低い。

SD011 (第16・17図、図版12)

底面の平らな浅い溝で、北に向かいその幅を広げている。

遺物 18はロクロ成形された土師器壺である。19は須恵器壺の口縁部片で、20は須恵器蓋のボタン状紐である。中央部が膨らみをもつ。

SD019 (第16・17図、図版12)

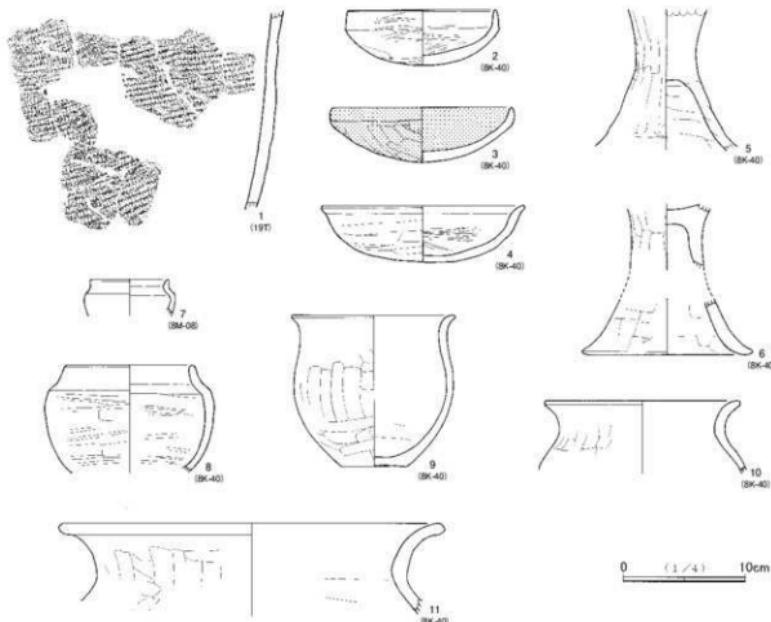
(3) 3区の中央部に位置する溝であるが、近・現代の所産である。

遺物 21は須恵器台付壺の底部片で、22はロクロ成形された土師器底部片である。周辺に存在する遺構からの混入である。

第4節 遺構外出土遺物 (第18図、図版12)

ここに取り上げた遺物は、1と7以外はおそらく(1)区東調査区内の008号遺構の北半部分が掘削された時点で掘り出されたものと考えられる遺物である。

1は(1)区西調査区の確認時に出土した縄文時代中期の深鉢片である。2~4は土師器壺で、3は内外面に赤彩が施される。5・6は土師器高壺の脚部である。7・8は土師器短頸壺で、9~11は土師器壺である。9は小型のもので胴部の張りは強くない。10は頸部の屈曲が緩やかで肩の張りが強くないものである。11は頸部が強く屈曲し口縁部が大きく外反する。



第18図 遺構外出土遺物

第3表 土器觀察表

探査番号	造営者名	種類	埋蔵	法量 (cm)	遺存度	地土	色調・斑成		技法	備考
							内面	外面		
9-1	008	土器部	环	口径13.6 底径3.7 高さ5.2	全体 70%	微砂粒多量 微砂粒少量	内面 明赤系5YR5-6	内面 明赤系5YR5-6	ミガキ	外面部一部赤 底面部赤
							外面部 明赤系5YR5-7	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	
9-2	008	土器部	环	口径13.1 底径3.7 高さ5.2	全体 70%	微砂粒多量、特に白 色微砂粒目立つ	内面 明赤系2.5YHS-6	内面 明赤系2.5YHS-6	ミガキ	外面部一部赤 底面部赤
							外面部 明赤系2.5YHS-6	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎナチュラル	
9-3	008	土器部	环	口径12.2 底径4.2 高さ3.7	全体 45%	微砂粒多量 微砂粒少量	内面 明赤系7.5YR5-4	内面 明赤系7.5YR5-4	ミガキ	外面部一部黒 底面部黒
							外面部 明赤系7.5YR5-4	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	
9-4	008	土器部	环	口径12.0 底径3.9 高さ3.5	全体 35%	微砂粒中量	内面 明赤系7.5YR6-4	内面 明赤系7.5YR6-4	ミガキ	外面部黒色処理の可能 性あり 内外面スス
							外面部 明赤系7.5YR6-4	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	
9-5	008	土器部	环	口径12.8 底径4.3 高さ3.7	全体 35%	微砂粒中量	内面 明赤系10YR2/1	内面 明赤系10YR2/1	ミガキ	内外面黒跡、スス付 着
							外面部 明赤系10YR2/1	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	
9-6	008	土器部	高环	口径11.3 底径10.1 高さ7.0	全体 70%	微砂粒多量	内面 明赤系2.5YHS-6	内面 明赤系2.5YHS-6	ミガキ	内外面黒色処理
							外面部 明赤系2.5YHS-6	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎナチュラル	
9-7	008	土器部	台形	口径10.9 底径10.9 高さ6.9	1脚～肩 55%	微砂粒多量	内面 明赤系10YR6/4	内面 明赤系10YR6/4	ミガキ	底部後穿孔
							外面部 明赤系10YR6/4	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎナチュラル	
9-8	008	土器部	束	口径10.0 底径10.0 高さ10.0	全体 25%	微砂粒多量	内面 明赤系2.5YR5-6	内面 明赤系2.5YR5-6	ミガキ	赤み帯びる
							外面部 明赤系2.5YR5-6	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	
9-9	008	土器部	束	口径9.6 底径9.6 高さ6.5	全体 20%	微砂粒多量	内面 明赤系10YR3/2	内面 明赤系10YR3/2	ミガキ	内面蒸氣気味 外面部スス
							外面部 明赤系10YR3/2	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎナチュラル	
10-1	021	土器部	环	口径10.6 底径10.6 高さ3.95	全体 30%	微砂粒微量、赤褐色 スコリア粒合	内面 明赤系2.5YR5-6	内面 明赤系2.5YR5-6	ミガキ	表面剥落気味
							外面部 明赤系10YR2/4	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎナチュラル	
10-2	021	土器部	高环	口径12.5 底径12.5 高さ3.5	全体 40%	微砂粒多量	内面 明赤系2.5YR5-6	内面 明赤系2.5YR5-6	ミガキ	細部が内外とも被熱
							外面部 明赤系2.5YR5-6	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎナチュラル	
11-1	010	須恵器	环	口径11.0 底径8.4 高さ4.1	全体 25%	微砂粒微量、墨黒褐色 粒合	内面 灰白色Y7/1	内面 灰白色Y7/1	ミガキ	全体的に墨黒氣味
							外面部 灰白色Y7/1	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎナチュラル	
11-2	010	土器部	环	口径12.9 底径12.9 高さ9.0	全体 90%	微砂粒少量	内面 黑褐色7.5YR3/1	内面 黑褐色7.5YR3/1	ミガキ	内外面黒色処理 口縫部使用によるスレ
							外面部 黑褐色7.5YR3/1	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	
11-3	010	土器部	环	口径12.7 底径12.7 高さ3.5	全体 100%	微砂粒中量	内面 明赤系7.5YR6-4	内面 明赤系7.5YR6-4	ミガキ	口縫部面になっている
							外面部 明赤系7.5YR6-4	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	
11-4	010	土器部	环	口径13.1 底径13.1 高さ4.3	全体 80%	微砂粒中量	内面 明赤系5YR5-4	内面 明赤系5YR5-4	ミガキ	口縫部使用によるスレ 内外面赤褐色の可能性あり
							外面部 明赤系5YR5-4	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	
11-5	010	土器部	环	口径13.0 底径13.0 高さ3.8	全体 50%	微砂粒多量	内面 明赤系2.5YR5-6	内面 明赤系2.5YR5-6	ミガキ	内外面赤褐色 底部裏あり
							外面部 明赤系2.5YR5-6	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	
11-6	010	土器部	环	口径14.0 底径9.6 高さ3.4	全体 50%	微砂粒多量	内面 黑褐色7.5YR4/1	内面 黑褐色7.5YR4/1	ミガキ	内面黒色処理 外面部赤褐色
							外面部 黑褐色7.5YR4/1	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	
11-7	010	土器部	环	口径14.0 底径10.0 高さ4.1	全体 50%	微砂粒多量	内面 明赤系7.5YR5-3	内面 明赤系7.5YR5-3	ミガキ	底部裏あり
							外面部 明赤系7.5YR5-3	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	
11-8	010	土器部	环	口径12.8 底径9.5 高さ4.0	全体 40%	微砂粒中量	内面 黑褐色7.5YR2/1	内面 黑褐色7.5YR2/1	ミガキ	内外面黒色処理 内外面赤褐色
							外面部 黑褐色7.5YR2/1	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	
11-9	010	土器部	环	口径12.9 底径9.5 高さ3.7	全体 30%	微砂粒少量	内面 灰白色5YR4/3	内面 灰白色5YR4/3	ミガキ	内外面赤褐色 口縫部使用しえり
							外面部 灰白色5YR4/3	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	
11-10	010	土器部	环	口径14.8 底径9.8 高さ6.3	全体 80%	微砂粒中量 赤褐色スコリア粒合	内面 黑褐色7.5YR7/4	内面 黑褐色7.5YR7/4	ミガキ	内外面黒色処理
							外面部 黑褐色7.5YR7/4	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	
11-11	010	土器部	小要器	口径12.0 底径6.2 高さ11.7	全体 100%	微砂粒多量	内面 灰白色10YR7/4	内面 灰白色10YR7/4	ミガキ	動土を含めて黒色
							外面部 灰白色10YR7/4	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	
11-12	010	土器部	要	口径11.4 底径7.5 高さ5.0	全体 25%	微砂粒少量	内面 灰白色10YR8/1	内面 灰白色10YR8/1	ミガキ	動土を含めて黒色
							外面部 灰白色10YR8/1	外面部 ナチュラル	ヘラケツリ接ぎミガキ	

持区No	造構No	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成		接法	備考
							内面	外面		
11 14	010	土師器	甕	口径(15.4)	口縁部	微砂粒多量	内面 黒褐色 7.5YR3/1	内面 ナデ		
				底径 -	25%		外面 黑 10YR2/1	外面 ナデ ヘラケズリ		内面とも黒色化
				最高(6.0)			焼成 良好	焼外面 -		
11 15	010	土師器	甕	口径 -	底部	微砂粒中量	内面 黒褐色 7.5YR4/2	内面 ナデ ヘラケズリ		
				底径 7.4	100%		外面 黒褐色 7.5YR4/2	外面 ナデ ヘラケズリ		底部付近剥落著しい
				最高(3.7)			焼成 良好	焼外面 ヘラケズリ		
11 16	010	須恵器	环	口径(18.4)	底部	白色砂粒微量	内面 灰 NS-0	内面 ナデ		
				底径 -	25%		外面 灰 5Y5/1	外面 ナデ ロクロナデ		底部厚みあり
				最高(1.8)			焼成 良好	焼外面 回転ハーフ切り ナデ		
11 17	010	土師器	甕	口径(21.0)	口縁部	微砂粒多量	内面 にぶい 黒 10YR6/3	内面 ナデ		
				底径 -	25%		外面 黒褐色 10YR5/2	外面 ナデ ヘラケズリ ミガキ		
				最高(7.5)			焼成 良好	焼外面 -		
11 18	010	土師器	甕	口径(21.0)	口縁部	微砂粒多量	内面 にぶい 黒 7.5YR7/4	内面 ナデ ヘラナデ		
				底径 -	30%		外面 棕 5YR6/6	外面 ナデ ヘラケズリ 後ミガキ		表面赤みを帯びる
				最高(8.0)			焼成 良好	焼外面 -		
11 19	010	土師器	瓶	口径 25.5	全体	微砂粒多量	内面 黒褐色 10YR3/2	内面 ナデ ナガキ		
				底径(9.9)	60%		外面 にぶい 黒 7.5YR5/3	外面 ナデ ヘラケズリ 後ミガキ		内外面ヌス
				最高(20.4)			焼成 良好	焼外面 -		
12 1	009	土師器	环	口径(13.7)	全体	砂粒多量	内面 にぶい 白 5YR5/4	内面 ミガキ		
				底径 10.2			外面 にぶい 白 7.5YR5/4	外面 ナデ ケソリ一部 ナガキ		
				最高(5.5)	50%		焼成 良好	焼外面 ヘラケズリ 一部 ナガキ		
12 2	009	土師器	环	口径(14.2)	全体	微砂粒少量、白色粘物質含	内面 棕 7.5YR6/6	内面 ナデ ミガキ		
				底径(8.8)	30%		外面 棕 7.5YR6/6	外面 ナデ ヘラケズリ 後ミガキ		被熱
				最高(3.6)			焼成 良好	焼外面 ヘラケズリ ミガキ		
12 3	009	土師器	环	口径(12.9)	全体	微砂粒子中量	内面 にぶい 棕 7.5YR6/4	内面 ナデ 後ミガキ		
				底径 -	30%		外面 にぶい 棕 7.5YR6/4	外面 ナデ ヘラケズリ 後ミガキ		黒色処理の可能性あり
				最高(3.5)			焼成 良好	焼外面 -		
12 4	024	土師器	环	口径(13.0)	全体	微砂粒多量、赤褐色	内面 にぶい 棕 7.5YR6/4	内面 ナガキ		
				底径 大底		スコリ亞合	外面 にぶい 棕 7.5YR7/4	外面 ヨコナデ ケソリ後ナデ		内外面黒化・棗?
				最高(3.6)			焼成 良好	焼外面 -		
12 5	024	土師器	瓶	口径 -	口縁部	微砂粒多量	内面 にぶい 白 5YR5/4	内面 ナデ		
				底径 -	瓶底		外面 にぶい 白 5YR5/4	外面 ヨコナデ ヘラケズリ		
				最高(6.2)			焼成 良好	焼外面 -		
17 1	SK001	土師器	环	口径(11.6)	全体	微砂粒中量	内面 にぶい 黑 7.5YR6/4	内面 ナデ		
				底径(7.6)	20%		外面 にぶい 黑 7.5YR7/4	外面 ナデ ヘラケズリ		
				最高(3.8)			焼成 良好	焼外面 ヘラケズリ		
17 2	SK001	須恵器	环	口径(14.6)	全体	雪母綱目立つ	内面 黄褐 25Y6/1	内面 ナガキ		
				底径(10.2)	40%		外面 黄褐 9N/4	外面 ナデ ロクロナデ		當揮產
				最高(3.5)			焼成 良好	焼外面 ハラ切り後ヘラケズリ		表面が全体に剪減気味
17 3	SK001	土師器	环	口径(20.7)	全体	微砂粒中量	内面 にぶい 黑 7.5YR5/4	内面 ナガキ		
				底径(19.5)	25%		外面 にぶい 黑 10YR5/3	外面 ナデ ヘラケズリ 後ミガキ		外面赤部(遺存不良)
				最高(9.5)			焼成 良好	焼外面 ナデ		
17 4	SK001	須恵器	瓶	口径 -	脚一底	精緻	内面 -	内面 ナガキ		
				底径(4.5)	脚部100%		外面 陶白 10YR7/1	外面 ロクロナデ 回転ヘラケズリ		内外面塗
				最高(6.85)			焼成 良好	焼外回転ヘラケズリ		瓶付付け口部
17 5	SK002	土師器	环	口径(11.6)	全体	微砂粒少量	内面 にぶい 黑 10YR6/4	内面 ナデ 後ミガキ		
				底径(8.1)	25%		外面 にぶい 黑 10YR6/4	外面 ナデ ヘラケズリ		口縁増厚みあり
				最高(3.8)			焼成 良好	焼外面 ヘラケズリ		
17 6	SK002	土師器	环	口径(14.8)	全体	微砂粒中量	内面 明ホホ 5YR5/6	内面 ナガキ		
				底径 -	15%		外面 明ホホ 5YR5/6	外面 ナデ ヘラケズリ ミガキ		内外赤部
				最高(3.2)			焼成 良好	焼外面 -		
17 7	SK002	土師器	高环	口径 -	脚部破	微砂粒微量	内面 黄褐 25Y7/3	内面 ナガキ		
				底径 -	片		外面 黄褐 25Y7/3	外面 ナガキ		
				最高(3.5)			焼成 やや不良	焼外面 -		
17 8	SK002	須恵器	甕	口径 -	口縁部	密 石英粉合	内面 黑自 25Y7/1	内面 ロクロナデ		
				底径(4.8)	瓶片		外面 黑自 25Y7/1	外面 ナデ ヘラケズリ		釉面
				最高(4.8)			焼成 良好	焼外面 -		
17 10	SK003	土師器	环	口径 -	口縁部	砂粒中量	内面 棕 5YR6/6	内面 ナデ ヘラケズリ		
				底径 -	片		外面 棕 5YR6/6	外面 ナデ ヘラケズリ		
				最高(4.9)			焼成 やや不良	焼外面 -		
17 11	SK003	須恵器	环	口径 -	脚部	精緻	内面 黄褐 25Y6/1	内面 ロクロナデ		
				底径(7.6)	25%		外面 黄褐 25Y6/1	外面 ナデ ヘラケズリ		
				最高(4.55)			焼成 良好	焼外面 手持ちヘラケズリ		
17 12	SK003	須恵器	釜	口径 -	フマニ		内面 陶白 5Y7/1	内面 ナデ		
				底径 -	品		外面 陶白 5Y7/2	外面 ナデ		やや器面サラつく
				最高(1.2)			焼成 良好	焼外面 -		
17 13	SK003	須恵器	甕	口径 -	脚部破	密密 白色砂粒微量	内面 陶底 10YR6/1	内面 ナタキ		
				底径(7.6)	片		外面 陶底 10YR6/1	外面 ナタキ		
				最高(4.5)			焼成 良好	焼外面 -		
17 14	SD002	土師器	环	口径(14.4)	口縁部	微砂粒少量	内面 棕 5YR6/6	内面 ナデ ミガキ		
				底径 -	瓶片		外面 棕 5YR6/6	外面 ナデ		外面赤部(遺存不良)
				最高(3.2)			焼成 良好	焼外面 -		

持因No	造構No	種類	器種	法量(cm)	造存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
17 15	SD003	須恵器	壺	口徑(17.0) 底径(8.8) 高さ(1.8)	口縁部 底部 身部	精緻 破片	内面 黄灰 2.5Y6/1 外面 オリーブグリーン 5Y5/4 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ	表面灰釉
17 16	SD005	土師器	壺	口徑(9.1) 底径(8.8) 高さ(1.2)	口縁部 底部 身部	微砂粒中量 50%	内面 黑灰 7.5Y4/2 外面 黑灰 10Y4/1 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ヘラケズリ 焼成 良好	
17 17	SD007	須恵器	壺	口徑(14.1) 底径(8.8) 高さ(4.6)	全体 口縁部 底部	微砂粒少量 30%	内面 黄灰 2.5Y6/1 外面 黄灰 2.5Y6/1 焼成 良好	内面 ヘラナデ ロクロナデ 外面 ロクロナデ	ロクロ目強い
17 18	SD011	土師器	壺	口徑(13.4) 底径(8.8) 高さ(3.1)	口縁部 底部 身部	白色砂粒、紫母貝含 15%	内面 に赤い黄緑 10Y6.3 外面 に赤い黄緑 10Y7/4 焼成 やや不良	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ	陰陰灰 被熱
17 19	SD011	須恵器	壺	口徑(7.7) 底径(4.5) 高さ(3.7)	口縁部 底部 身部	微砂粒 破片 少量	内面 白灰 10Y8/1 外面 灰オーラップ 5Y5/3 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	内外輪軸蓋
17 20	SD011	須恵器	壺	口徑(7.7) 底径(4.5) 高さ(3.7)	口縁部 底部 身部	微砂粒少量	内面 白灰 10Y8/1 外面 灰白 5Y7/2 焼成 やや不良 貫入	内面 ナデ 外面 ナデ	
17 21	SD019	須恵器	壺	口徑(8.4) 底径(8.4) 高さ(3.2)	底部 身部	精緻 15%	内面 黄灰 2.5Y6/1 外面 黄灰 2.5Y6/1 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 回転ヘラケズリ	中心部軸蓋
17 22	SD019	土師器	壺	口徑(7.4) 底径(7.4) 高さ(3.7)	口縁部 底部 身部	微砂粒中量 30%	内面 に赤い黄緑 10Y8/4 外面 灰 10Y8/6 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ヘラケズリ 焼成 良好	
18 2	8K - 40	土師器	壺	口徑(12.0) 底径(9.8) 高さ(4.5)	全体 口縁部 底部	微砂粒中量 35%	内面 黃 5YR6/6 外面 棕 5YR6/6 焼成 やや不良	内面 ロクロナデ 外面 ヘラケズリ	内外黒色呉理 (遺存不良)
18 3	8K - 40	土師器	壺	口徑(14.6) 底径(11.5) 高さ(4.6)	全体 口縁部 底部	微砂粒少量 25%	内面 黃 5YR6/6 外面 明赤 10YR6/6 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラケズリ	内外赤系 (遺存不良)
18 4	8K - 40	土師器	壺	口徑(16.4) 底径(13.6) 高さ(4.6)	全体 口縁部 底部	微砂粒多量 40%	内面 明赤 5YR4/6 外面 に赤い赤系 2.5YR5/4 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラケズリ	
18 5	8K - 40	土師器	高壺	口徑(11.5) 底径(10.5) 高さ(4.0)	口縁部 底部	微砂粒多量 40%	内面 黒褐 10Y3/1 外面 明赤 5YR5/6 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラケズリ	胎土自体赤く発色
18 6	8K - 40	土師器	高壺	口徑(14.0) 底径(11.5) 高さ(4.6)	口縁部 底部	微砂粒多量 30%	内面 棕 7.5YR6/6 外面 明赤 5YR5/6 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラケズリ	
18 7	8M - 08	土師器	短腹壺	口徑(6.2) 底径(3.0)	口縁部 身部	微砂粒少量 20%	内面 棕 5YR6/6 外面 棕 5YR6/6 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
18 8	8K - 40	土師器	短腹壺	口徑(10.4) 底径(8.8) 高さ(8.8)	口縁部 底部	微砂粒多量 20%	内面 明赤 5YR5/6 外面 棕 5YR6/6 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラケズリ	全体的に崩滅
18 9	8K - 40	土師器	小型壺	口徑(13.4) 底径(5.4) 高さ(12.4)	全体 口縁部 底部	微砂粒中量 70%	内面 黒褐 10Y8/1 外面 に赤い黄緑 10Y8/3 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラケズリ 焼成 良好	
18 10	8K - 40	土師器	壺	口徑(11.8) 底径(6.6) 高さ(6.6)	口縁部 底部	微砂粒少量 20%	内面 に赤い赤系 5YR4/4 外面 明赤 5YR4/6 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラケズリ	内外面ともに崩滅
18 11	8K - 40	土師器	壺	口徑(30.8) 底径(7.4) 高さ(7.4)	口縁部 底部	微砂粒多量 60%	内面 に赤い黄緑 10Y8/3 外面 に赤い赤系 5YR5/4 焼成 やや不良	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラケズリ	被熱のため胎面荒れて いる

第3章 総 括

(1) 西調査区

(1) 西調査区において一番特徴的なものは、確認調査時に出土した縄文時代中期の土器片であろう。九十九里平野全体で見ると、この時期の遺物が見られるのは主に中部地域から南部地域にかけてであり、北部地域においては、大網白里市の上貝塚等僅かな遺跡しかない。三反田遺跡全体から見てもこの調査区は、最も台地に近い部分にあたり、台地から離れると中期の遺物を見ることはない。この時期の九十九里地域の第1砂堤帯は、平野南半部から発達していき北半では未発達の部分が多くを占めていたと考えられ、人々は、生活の拠点を台地上におき、就労の場を台地下の湿地から海岸に求めたと推測される。

西調査区内の遺構を見ると、土坑004号からロクロ成形した壺の底部小破片が出土している。外面の調整が底部全面のヘラ削りで、体部下端は未調整である。おそらくは9世紀の所産と思われる。付近に溝状遺構005号・006号・007号が所在しており、それぞれ時代を明確にする遺物は出土していないが、土師質の土器片が検出されており、この土坑と関連した遺構であろうと推測される。また、005号には一部硬化面が存在し、通路として使用されたものと考えられ、004号は通路沿いに設けられた施設と言える。

(1) 東調査区、(2) 西調査区・東調査区

この調査区で注目されるのは、中央部付近の竪穴住居跡008号と021号であろう。2軒はその規模にはやや差異を認めるが、遺物からみる存在時期については近接している。7世紀前半に比定されるものであろう。古墳時代後期には、九十九里地域にも生活領域が広がったものと思われ、遺跡数も増大している。しかし、実際に発掘調査された遺構例は、まだ少なく貴重な例とされるだろう。

また、010号遺構は、簡易の井戸として掘られた土坑であろう。湧水により短時間である程度の水量が確保できる。8世紀中葉のものと思われ、この時期には、砂堤上が農耕に利用されていたのであろう。

(3) 3調査区

溝状遺構が多く存在する。砂堤と同一方向に延びるものと、砂堤に直交するような方向に掘られたものがあり、使用目的に差があるのではないかと思われる。出土遺物は、8世紀代のものが多く、南に隣接する畑表面からも、奈良・平安時代の土器が大量に観察される。おそらく、この時期の集落が存在する可能性が高いものと考えられる。

参考文献

- 小高春雄ほか 1985『大網白里町上貝塚発掘調査報告書』大網白里町町史編纂委員会
西山太郎 2002『九十九里地域の低地遺跡再考』『財團法人東経文化財センター設立10周年記念論集』

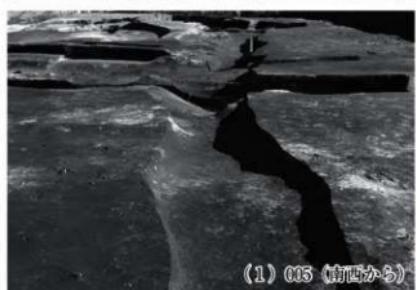
写 真 図 版



三度田遺跡

航空写真 (S-31 10,000)







(1) 東調査区調査前（南西から）



(1) 東調査区確認調査（東から）



(1) 東調査区確認トレンチ（西から）



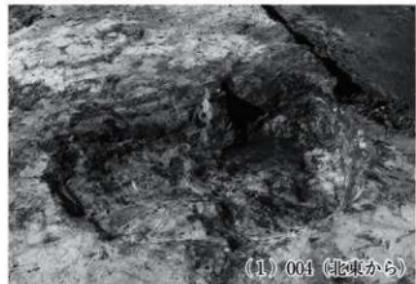
(1) 001（東から）



(1) 002（東から）



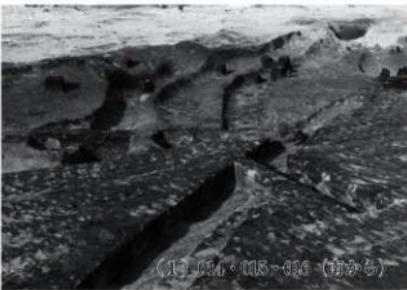
(1) 003（東から）



(1) 004（西北東から）



(1) 003遺物（北東から）







(1) 東調査区全景 (東から)



(1) 東調査区全景2 (東から)



(2) 西調査区 (西から)



(2) 西調査区×トレンチ (西から)



(2) 西調査区×水路 (北東から)



(3) 1区調査区セクション (北から)



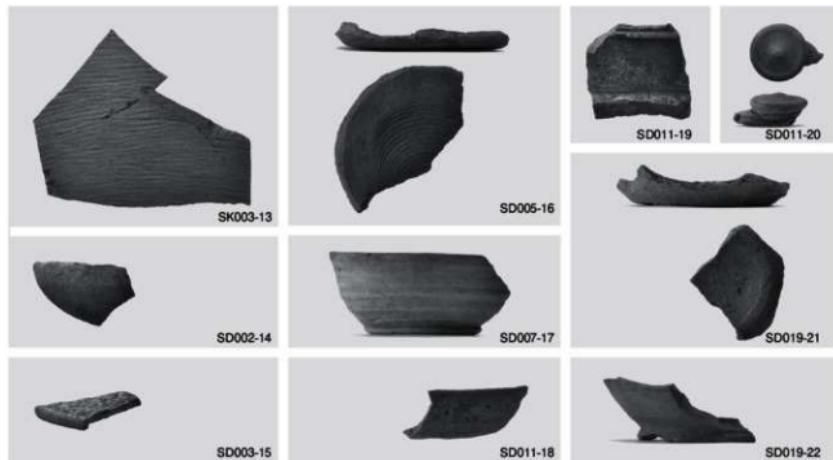




遺構出土遺物（1）



遺構出土遺物（2）



遺構出土遺物（3）



遺構外出土遺物

報告書抄録

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 21 集

横芝光町三反田遺跡

—国道 126 号銚子連絡道(山武東総道路二期)事業埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 29 年 3 月 24 日発行

編集・発行

千葉県教育委員会

千葉市中央区市場町 1-1

印 刷

三陽メディア株式会社

千葉市中央区浜野町 1397

